

室内環境を支えるために

鈴木 圭祐

理研計器株式会社 営業技術部 営業企画課

この度は、「薫風」への寄稿の機会を頂き誠にありがとうございます。

私は、入社から約6年間、種々のガス感度調査、各種検知器の取扱説明書の作成等の営業支援業務や市場調査業務を行ってまいりました。現在は主に展示会・学会の運営業務を行っておりますが、元々は生物学を専攻してまいりました。大学院修士課程では、現在猛威を振るう新型コロナウイルスの病態に類似した川崎病の血栓形成に関わる細菌毒素の構造解明を行っていたこともあり、急性血液浄化器を製造販売する医療機器会社に入社、その後大阪大学大学院博士後期課程に進学し、2014年に大阪大学微生物病研究所にて卵巣がん治療薬（分子標的薬）の作製において博士（工学）を取得しました。2020年2月からは、若年ながら本学会の出版委員会委員に指名頂き、特に査読において、多くの新しい論文に触れること、そしてそれを世の中に出すお手伝いが出来ることを大変喜ばしく貴重な経験をさせて頂いております。初めて参加させて頂いた平成30年学術大会では、幅広い分野の研究者の先生方や企業の方が、幅広い視点から時代に沿った室内環境の問題点や今後の課題を見出し、研究されているという印象を受けました。これは、学生時代に習得した生物学を軸に種々のガスやガス検知器を取扱う私と通じるものがあり、また弊社のバックグラウンドともリンクするのではないかと考えております。

またここで弊社の歴史を紐解くと、理化学研究所の主任研究員であった辻二郎（後に弊社の第2代社長に就任）がオイルタンカーの爆発事故を防止するために、「爆発計」と称する光波干渉式ガス検知器を昭和初期に発明しました。その後、炭鉱場で多くの事故が起こるようになり、タンカー用に開発された爆発計を改良し、「理研ガス検定器」として販売しました。研究所では賄えないほどの生産需要があり、東京都板橋区小豆沢町にあった富國機械株式会社を買収し、1939年3月15日に「富國機械株式会社」の商号から「理研計器株式会社」に変更し、現在に至ります。昭和初期頃にシックハウス症候群が問題視されるようになると、その原因物質のホルムアルデヒド検知器を2002年に開発しました。このように弊社は、理化学研究所の精神と伝統を引き継ぎ、時代に沿った、お客様のニーズに合った製品を日々開発し、自社製品だけでなく、社内にまだ技術がない商品（社外商品）についてもラインナップしております。本学会におきましては、上記でご紹介しましたホルムアルデヒド検知器の後継機や社外商品であるPID（光イオン化式）搭載のVOC検知器を展示・ご提案をしております。

今後も時代に沿いながらお客様のニーズに合った製品をご用意し、空間内の空気質測定に微力ではありますが、お役に立てれば幸いです。